アン・ベアリング、ジュールズ・キャシュフォード著／
森雅子、藤原達也訳

# 『図説世界女神大全』Ⅰ、Ⅱ

（原書房・二〇〇七年）

上村　くにこ

『図説世界女神大全』Ⅰ、Ⅱは、アン・ベアリングと、ジュールズ・キャシュフォードという二人のユング派の女性研究者によって一九九九年に書かれた大作である。もともと八〇〇頁にわたるこの大著が、森雅子、藤原達也という、信頼に足る訳者によって二巻本として二〇〇七年に翻訳出版された。書評のはじめに、この種の本の翻訳をよくぞ流れるような読みやすい文章に直してくださったという感嘆を表することから始めたい。この本は、女性のジェンダーをもつ神とは何であるのかを、旧石器時代から新石器時代の図像的研究から始まって、クレタ島、メソポタミア、エジプト、バビロン、ギリシア・ローマを へて、キリスト教のマリア、イヴそしてソフィアまで、ただ一本の目線で論じている。地域や時代によって異なる用語や言い回しを正確に伝えるための努力は膨大なもので、眼にみえない労苦に頭がさがる。しかし翻訳の困難はそこにあるだけではない。著者たちは従来の言葉では表すことができない概念を私たちの前に示そうとしているので、ときに唐突に詩句を引用したり、皮肉に満ちた反語を用いたりしながら、深甚にして難解な文体を用いている。原題は“The myth of the goddess, evolution of an image”であるが、まずはこの goddess を、石器時代の「女神」から現代の「女神」まで、いつも女神と訳していいものかどうかという根本的問題から訳者たちは立ち向かわなければならなかっただろう。

有史以前、自然や大地に根ざした女神と呼ばれる霊的存在が、男神より先に考え出され、圧倒的な宗教的・社会的影響力を持っていた。生命は無限で永遠であって、自然が周期をもって巡るように、その力は女という表象をとおしてあらわれるという考えかたが、この古宗教の基礎にある。旧石器・新石器時代を通じて、二万年かそれ以上の時期にわたって、自然を崇めるこの宗教が高い文化水準に達していた。しかし青銅器時代から鉄器時代にかけて、男性ジェンダーを持つ霊的存在が力を得るプロセスが始まり、以後男神が絶対的支配を誇るようになり、女性的霊性は力を失い、転落しつづけて今日に至っている。しかし女神的なるものは、決して死に絶えることなく、分散した形ではあるが、今日までしっかりと生き残っているということを、著者たちは証明しようとしている。

つい最近までこの考え方は、偏ったフェミニスト的イデオロギーとして、学問的には正当とは考えられなかった。しかしリーアン・アイスラーの文化変容理論、ジェイムス・メラートを始めマリア・ギンブタスなどの考古学、さらにはエリザベス・ゴールド＝ディヴィス、バーバラ・ウォーカーなどの宗教学、さらにはサリー・ビンフォードなどの人類学等、さまざまな異なったルートから同じ結論に達しつつあり、次第に正統的な推論と認められる過程にある。この本はユング派の心理療法というルートから踏みかためるものである。

女神の宗教が五〇〇〇年ころ前に衰退・消滅してから、さらに悠久の時間をへた前三〇〇〇年ころ、やっと「文明の夜明け」が始まったとされている。それ以前に女性的なるものを思想の核とした高い文化があったなどと主張することは、いまでも荒唐無稽な夢を語るものとされかねない。これらの本に共通する特徴は、徹底的に学問的たらんとする姿勢をもちながら、その語り口が情熱的であるという点である。まだ公認されていないことを証明しようとするとき、考古学的証拠がおどろくような速さで揃ってきたとはいえ、よりどりみどりでふんだんに証拠を並べるというわけにはゆかないので、そのあいだを十分根拠のある推論で埋めなければならず、おのずと力が入った文体になる。既成の表現では言い表すことが不可能な物語を表現しようとするとき、文体はときに難解、ときに飛躍して隠喩に満ちたあまりに文学的表現となって、読み手にも努力が求められる。

女神の神話が消滅してから久しい。今日、自然＝生命＝女を不用意に主張することは、フェミニズムのジレンマに陥ることになるので用心が必要だ。個々の女性の生きざまと、女の表象を混同しないように気をつけなければならない。著者たちは旧石器・新石器時代にあれほど豊かに花開いた女神宗教がどうして消えることになったのか、その過程を丹念にたどる。だから一巻は二万年以上前のものとされる古い表象の研究から始まる。高さ四三センチのローゼルの女神像や、身長一〇センチのヴィレンドルフの「ヴィーナス」像などの分析である。膨らんだ臀部、誇張された乳房、必ず書き込まれている陰部の三角形から、この像は「豊穣」のシンボルであると片付けられてきたが、著者たちはさらに進めて、これらの像は女性の身体が出産する力があることを強調しており、そこに神秘の顕現を見たはずだと考える。ギンブタスが研究した古ヨーロッパでは、出産行為をしている女神を表わす像は、極めて稀であるのに、アナトリア（現在のトルコ）にあるチャタル・ヒュユクの遺跡では圧倒的にたくさんの出産シーンが表現されていることに著者たちは注目する。「あたかもこの文化が生命をその最大のドラマである出産の瞬間に捉えようと欲していたかのようである」と著者たちは指摘する。出産はスピリチュアルな行為で、女性たちが出産するときには、出産のドラマを表象する聖堂に赴いて出産したと推察されている。聖堂は生命の色である赤色に塗られており、巨大な花の形をした女神や、長い髪をなびかせて疾走あるいは旋回しながら踊っている女神などが壁絵として描かれているという。またピンク色に塗られた部屋もあって、そこには七羽の禿鷹が、黒色ではなく赤色で描かれており、羽を拡げて人間の上を飛び回っているが、その人間たちの首はもげている。人間

はまるで神の顕現を前にしているかのように両手をあげている。人間の肉が禿鷹の姿をした女神に食べられることによって、魂は新しい世界につれていってもらえると信じていたと思われる。著者たちは言っていないが、アナトリアでは鳥葬が行われていたという推論も成り立つ。「禿鷹は腐肉を食糧としているので、死を『もたらす』というよりは、すでに死んでいるものを生命へと連れ戻す」と著者は言う。女神は古いものを食うことによって、新しい周期を開いてくれる存在であるから、死の女神と出産の女神は同一の神の二つの顔であったということを、禿鷹＝女神の図はよく示してくれる。

さらにイギリスのストーンヘンジの遺跡シルベリー・ヒルと呼ばれている丘は、実は出産最中の女神を表しているという分析も紹介されている。丘は胎児をはらんでいる子宮であり、丘を取りかこむ溝は女神の身体であるという。満月が堀に映ってしだいに移動してゆくさまは、まるで女神の子宮から子供の頭が出てくるように見える。その月影はあたかも子供が乳房に吸い付くように、女神の胸までとどくように作られ、水面は月光でミルク色に染まるという。子供が子宮から「切り離される」ことは、また同時に収穫物を「切りとる」時期を女神が示唆していると考えていたという推論が紹介される。

これを読んで、最近とみに進歩している日本の縄文図像学の考え方と、発想の点で類似する点が多いのに驚いた。長野県井戸尻で発掘された住居は卵型をしていて「母なる子宮」をかたどっており、その入口は冬至の日の翌朝、朝日が差し込む方向に向いているという。復活した太陽の光が子宮のなかにしみ込んで、生命の蘇りを演出したのではないかと推論されている。さらに驚くのは、集落そのものも母体を表現しているという。集落の中心には広場があり、そのまわりを墓群が取り囲み、その背後に住居が卵型に並んでいる。広場の入口は、やはり冬至の翌朝に朝日が入る方向に開いているという。さらに人面のついた土器がたくさん発見されているが、これもふっくらとした女神の胎内を表わしている。壺の口には綿帽子をかぶったような人面がついているのだが、これは出産しつつある女神なのか、生まれ出ようとしている子供なのか、あるいはその両方を表しているのか、とにかく多重の表象を帯びている。この人面は欠きと取られたあとがあり、壺もわざと破壊されている。出産というドラマが、このように住んでいる空間から祭祀用の器具にいたるまで演出されていたということになる。『図説女神大全』は研究対象を西洋に限り、極東・エジプト以外のアフリカ・南米の女神の物語は語られていないのだが、ひょっとしたら女神信仰は世界中普遍的にみられるのかもしれない。これからワクワクするような新発見がどんどん出てくるだろう。

女神というと現代では若く美しい女性しか思い浮かばないが、古宗教の女神は月と結びつけられ、また蛇、鳥、魚、蜂、熊など、ときに恐ろしく、ときにユーモラスで可愛い姿をとる。その背後には永遠の生命宇宙への信仰がある。青銅器時代になると、女神への絶対的信仰は変わらないが、女神の表象は人間的になり、しかも女神の子供や愛人、娘などの新しい登場人物がふえてくる。著者はこうした女神の分化を、ユング派なじみのゾエとビオスという概念で説明する。どちらもギリシア語で生

命を意味するが、ゾエとは無限で永遠の生命全体をさすのに対して、ビオスとは個々の命の現れで、生まれては消える有限の存在である。ゾエを無限に長い糸とすれば、ビオスはその糸につながれた数珠玉に譬えられる。見えるものと見えないものと区別してもいいかもしれない。ビオスは形ある生命として生まれ、開花したのち衰退し死ぬ。死のあとには必ず再生が約束され、周期的にこのプロセスをたどる。

ゾエとビオスの区別は、この本を一貫して流れるキーワードとなっている。女神思想では、光と闇は、古い月と新しい月が抱きあっているように、常に変化する全体のなかで一つに統合されているものであったが、インド＝ヨーロッパ語族の文化が支配的になってからは、光と闇ははっきりと区別され、両者はつねに対立し戦い合うものと考えられるようになった。神は闇のパワーを退治する光ということになる。同様に天と地、時間と永遠、生と死も、互いに対立するものと考えられるようになった。私たちはこの二項対立の発想に骨の髄から慣らされているので、それ以外の考えかたは奇妙きてれつなものに見えるようになってしまったのである。神は男のジェンダーを帯び、悪を打ち破る戦闘的な存在となった。しかしこの発想が支配的になったのは高々五〇〇〇年前から四〇〇〇年前のことで、それまでの女神文化が支配した時間の長さに比べると、つい最近とでもいいたいほどの短さなのである。

私たちがなじんでいる西欧の神話では、女神は男神の伴侶であるか、あるいは敗退が決定づけられている魔女である。表向きはこのように完全に消滅したように見える女神的発想が、ギリシア神話やユダヤ教、キリスト教のなかにどのように隠されているかをたどるのがⅡである。

キュベレー、イヴ、マリアと検討されている中で、私が最も面白いと思ったのは、知恵を表象するソフィアの研究である。知恵という理念は、キリスト教以前には女神のものとされていた。シュメールではイナンナ、エジプトではマアトやイシス、そしてギリシアではアテナ女神という具合である。しかしキリスト教では知恵とはロゴスすなわち神の声ということになり、知恵と女性的表象は切り離されることになった。しかしグノーシス派の考え方によれば、神は両性をもっており、ソフィアは男神の配偶者であると同時に、この神と一身同体の女性的片割れであった。ソフィアは自分自身である娘を産み落としたが、この娘ソフィアは自分が天界で生まれたことを忘れ、暗黒の王国に絡めとられて、暗い迷路をさまよう。苦悩と絶望に満ちた暗闇のなかで光を探すうちに、ソフィアは自分が何者であるのか目覚め、自分のうちに住む光に満ちた精神を見出す。精神とは、娘を救出するために神が闇に送り込んだキリストであった。ソフィアの魂とキリストの精神が聖なる結婚をすることによって、闇は光を抱き、光は闇を抱いているという古宗教の知恵が体現される。魂の変容を体験した知恵＝ソフィアは、正統キリスト教によって弾圧されたが、さまざまな形で生き続けた。例えば六世紀に、蛮人皇帝によって牢獄に閉じ込められ、死刑を待ちつつ拷問に打ちひしがれるボエティウスのもとに、ソフィアのヴィジョンがあらわれた。彼は女神と長い対話をすることによって、勇気をもって死に向かう力を得た。この対話を記録した書

は『哲学の慰め』として奇跡的に伝わり、ダンテの読むところになった。『神曲』のベアトリスは多分にこのソフィア像に触発されたのではないかと著者は推察している。さらに著者はソフィアの物語を、黒いマリアや錬金術、聖杯物語、そしてシンデレラにまで結びつけている。しかしこのあたりは、あまりに駆け足で、物足りない。

この本の最大の特徴は、女神をめぐる衝動的物語があまた渉猟され、具体的に詳しく紹介されていることである。さらに驚くべきことに、この無数の物語が実はたった一つのことを繰り返し言っているにすぎないということであり、しかもこの八〇〇頁をもってしても、まだ足りないほど、豊かなメッセージを含んでいるということである。

（うえむら　くにこ／神話論、ジェンダー論）